

<全体分析>

試験時間 2科目 150分

解答形式

記述・論述・選択

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

大問数は例年通り4問であり、問題のページ数は昨年の26ページから今年は22ページとやや減少したが、小問数にはあまり変化がなく、論述量は昨年よりやや増加したことから、全体の分量は昨年並みであった。また、易しかった昨年と比較すると詳細な知識を要求する知識問題が増加したことから、難易度は昨年よりやや難化した。

出題の特徴や昨年との変更点

例年、知識を問う問題と考察問題がバランスよく出題され、標準的な問題が多い。

その他トピックス

**2**問7が、直前講習『北大生物テスト』第2講**1**問2とズバリ!的中。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
<b>1</b>	記述 論述 選択	免疫 恒常性 遺伝 代謝 遺伝子	生物基礎・生物	問2-1 問題ではハーディ・ワインベルグ平衡にあることが明記されていないが、ハーディ・ワインベルグ平衡を仮定して計算する。 問6 下線部jの抗体は教科書には記載がないが、自然抗体と呼ばれ、自己免疫疾患との関連が示唆されている。	標準
<b>2</b>	記述 論述 選択	生殖 発生	生物	問4 受容体A遺伝子をノックアウトしていない細胞とノックアウトしている細胞の結果の違いから、実験に用いた細胞が受容体Aを発現していることを読み取る。	やや易
<b>3</b>	記述 論述 選択	神経 受容器 恒常性	生物基礎・生物	問1 空欄(ク)の「拮抗作用」の語は、一部の教科書のみに記載がある。 問6 延髄で血中の酸素濃度が感知されることは、教科書には記載がない。	標準
<b>4</b>	記述 論述 選択	生態	生物基礎・生物	問1 空欄(オ)・(カ)に関わる「同化効率」「生産効率」の式は、一部の教科書のみに記載がある。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・教科書レベルの基本的な知識を身につけ、その内容を正確に論述できるように練習を重ねよう。
- ・標準的な問題の演習を重ねよう。
- ・過去問の演習などを通して、北大の出題形式に慣れておこう。